

歴史は未来の羅針盤

温故知新

これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中ですので、ぜひともお買い求めください。

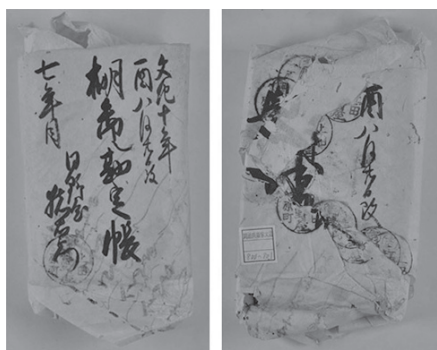
『近江日野の歴史』第七巻「日野商人編」を発刊して以来、日野商人の活動の様子をさまざまな視点から紹介しています。「日野商人編」の特徴として、詳細な経営分析に紙幅を割いていることがあげられます。一見すると難解に思われる経営分析ですが、今回はその材料となる「商用帳簿」と決算方式（帳合）について、解説したいと思います。

店卸帳と純資産

商家の古文書の中にはさまざまな商用帳簿が存在しますが、商家の経営分析に必要なものは「店卸帳」と呼ばれる帳簿です。店卸帳は、店の年度決算の際に作成される帳簿で、経営状態（その一年でどのくらいの利益をあげたか・損失があったか）と財産状態（決算時点で、その店にどの程度の資産があるのか）を知るために作成されました。用途ごとに記される売帳・買帳・金銀出入帳・大福帳・当座帳などをもとに総計

算されて作成される総決算帳簿が店卸帳にあたります。経営の要とも言うべき店卸帳は、出店から自宅へ送る際には封印され、勘定披露目まで神棚に供えられるなど厳重に管理されました。

店の経営には、一年の運営資金となる資本金が必要で、資本金は、帳簿上は「有金」「元金」「元手」などさまざまに記載されました。算出方法は種々ありますが、おおむねの商家では、この資本金に一年で得られた利益（損益）を積み重ねることで、「純資産」



▲厳重に封印された岡治兵衛家の店卸帳

と呼ばれるその家の実質の財産が算出されます。「日野商人編」の経営分析は、純資産の推移をあらわし、商家の規模を推し量ることを大きな目的としています。また、純資産の増減の原因を、細かな営業・資産科目の動向、時代背景を見ていくことによって明らかにしています。

日野商人と複式簿記

経営状態と財産状態を明らかにするための二種類の決算から構成されている帳簿を、現在では「複式簿記」と呼びます。双方の決算から導き出した利益（損益）の値が合致（近似）することで、経営と財産の管理が綿密になされていることが確認できる合理性の高い決算方式です。西洋式の簿記法が確立した現在では全国の会社・商店で広く用いられていますが、江戸時代においては日野商人の代表的な簿記技術とされています。日野商人が、江戸時代にこの技術をどのように編み出したのかはわ

かっていませんが、中井源左衛門家では、多店舗化して経営規模が大きくなっていく中、その財務管理の必要上から発達したと考えられています。しかし一方で帳簿には未熟な部分もあり、決算値が合致しない場合に帳尻を合わせるために微調整が行われるなど、試行錯誤の跡が垣間見える点も興味深く思われます。

本巻では中井家のほか、島崎善兵衛家、島崎利兵衛家、野田六左衛門家、矢尾喜兵衛家、岡忠兵衛家などが複式簿記の原理に基づいた決算方式を用いていたことが明らかにされています。

『近江日野の歴史』第3巻 近世編
発刊記念講演会のお知らせ

と き：3月24日（日）
午後2時から
（受付：午後1時30分から）

と ころ：日野公民館ホール

内 容：「日野の領主と村社会」

みずもとくにこ
水本邦彦編集委員（長浜バイオ大学教授）

「近世の日野を旅した人々」

あおやぎしゅういち
青柳周一執筆委員（滋賀大学教授）